



『金匱録』の書誌と佚文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 輝幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00016780">https://doi.org/10.24729/00016780</a>

# 『金匱録』の書誌と佚文

久保輝幸

## 要旨

『金匱録』は、長寿を得る方法などを記した仙方書である。六朝時代に広く読まれたが、唐代にはほとんど顧みられず、宋代に残巻が辛うじて存したものの、明代には失われていたらしい。現在に伝わる文献では、『医心方』のみに『金匱録』の佚文がみられる。一方、『金匱録』の佚文で「七禽食方」と似たものが、中国の古典籍で『神仙服食経』から引用されている。たとえば、北魏の『齐民要術』（約530年）では『神仙服食経』から「七禽方」が引かれ、南朝梁の『本草集注』（約500年）では「服食七禽散」が引かれている。また、この「七禽食方」は日本の七草粥の風習とも幾つかの共通点がある。4世紀の『抱朴子』仙薬篇には『金匱録』佚文に酷似する菊華水伝説があるので、葛洪が『金匱録』を目にしていた可能性もある。これらの記載により、『金匱録』は後漢から東晋までの間に成立したと推定できた。また撰者の京里先生は用里先生の訛りで、『金匱録』は用里先生に仮託した仙方書である可能性を示した。

## 1. 『金匱録』の書誌

『金匱録』は長寿を得る方法などを記した仙方書で、六朝時代に広く流布したが、唐代以降は重視されず、明代には散逸してしまっただけで、その佚文は、今のところ『医心方』（984年）延年方と益智方に残る5則のみである。先行研究も少なく、横佐知子氏の訳注<sup>(1)</sup>や本稿で参照している数編の論文があるのみで、十分に研究されてこなかった。

『金匱録』という書名は、張仲景医書の一つ『金匱要略』の無名氏序に、「仲景、『金匱録』、岐、黄、素、難の方千卷に近将す。其の混雜煩重を思い、求め有れど得難し」とある<sup>(2)</sup>。さらに、『隋志』医方（約656年）に「金匱録二十三卷目一卷、京里先生撰」と記載があり、岡西為人『宋以前医籍考<sup>(3)</sup>』などで考証されている。これらの先行研究で、『田

唐志』(約945年)と『新唐志』(約1044-1060年)に撰者を京里先生とする『金匱仙藥録』三巻が著録されることが指摘されている。撰者を同じくしていることから、『金匱仙藥録』は『金匱録』と同一の書か、抜粋した書と推定できる。

また『旧唐志』には『金匱仙藥録』の次に、「神仙服食經十二卷京里先生撰」と同じ撰者の『神仙服食經』が著録されている。『神仙服食經』は十巻本が『隋志』医方に重複して2ヶ所著録されるが、撰者を記さない。『隋志』医方には以下に示すように、『神仙服食經』を含め、多くの服食方書が著録されている。それぞれの内容はおそらく類似しており、伝承の過程で離合集散を繰り返し、様々な書名の仙方書が現れたと考えられる。

医方……

『神仙服食經』十巻	『雜仙餌方』八巻……
『服食諸雜方』二巻 <small>梁有「仙人水玉酒經」一卷……</small>	
『雜仙方』一巻	『神仙服食經』十巻
『神仙服食神秘方』二巻	『神仙服食藥方』十巻(抱朴子撰)、
『神仙餌金丹沙秘方』一巻	『叔脚服食雜方』一巻、
『金丹藥方』四巻	『雜神仙丹經』十巻
『雜神仙黃白法』十巻	『神仙雜方』十五巻
『神仙服食雜方』十巻	『神仙服食方』五巻
『雜神仙丹經』十巻	『雜神仙黃白法』十二巻
『神仙雜方』十五巻、	『服食諸雜方』二巻
『服餌方』三巻 <small>陶隱居撰。</small>	

こうした服食方書は日本にも多く伝わり、藤原佐世の『日本国見在書目録』(約891年成)には、次のように著録されている<sup>(4)(5)</sup>。

冊六 五行家……

『黄帝注金遺經 <sup>①</sup> 』十	『黄帝 <sup>②</sup> 金遺疏』四 <small>陳氏撰</small>
『黄帝金遺王門曾門經』三	『黄帝金遺誠 <sup>③</sup> 經』一……

冊七 医方家……

『大清經』十二 <small>玄超撰</small>	『大清』二 <small>上下</small>
『大清諸草木方集要』一	『大清神丹經上篇』一

『大清神丹經』一	『大清金腋丹經』一 ……
『仙薬方』一	『仙薬合方』一
『神仙服食薬方經』一	『五岳仙薬方』一
『五岳芝薬方』一	『神薬方』一
『雜薬方』一	『神仙新薬方』一
『神仙入山服薬方』一	……
『神仙服薬經』一	『老子神仙服薬經』一 ……
『五茄酒方』一 ……	『新修諸要太清秘方』十二 ……
『大清治方』八 ……	『新修大清秘經方』十二……
『神仙法方』一……。	

『日本国見在書目録』には、『金匱録』や『神仙服食經』は著録されていないが、類似する書名として『黄帝（注/王門曾門）金遺（誠）（經/疏）』や『神仙服食薬方經』、『神仙服（食）薬（方）經』などが著録されている。『金遺經』と名づく書は中国の目録にみえないが、「遺」は「匱」の異体字「遺」に似ており、「金遺」は「金匱」の訛と推定できる。『新唐志』には撰者を曹士蔦（8世紀）として『金匱經』三巻が著録される<sup>6)</sup>。梶原性全『万安方』にも『金匱經』の引文がある。

また『続日本紀』天平宝字元年（757年）条に、陰陽道の教科書として『黄帝金匱』が挙げられている。小坂眞二氏は安倍晴明撰『占事略決』を研究するなかで、康和四年（1102年）の太政官符にみえる『黄帝金匱經』と同一の書と推定とし、それは主要な典拠として『占事略決』の編纂に利用されたとする。この所謂『黄帝金匱經』は『六壬式經』等の典籍を集めて増訂して成った書とされる<sup>7)</sup>。『金匱録』を引用する『医心方』は『日本国見在書目録』の約90年後に編纂された。「經」の旁は草書体では上下に貫通するので、「録」が「經」に訛ることは考えうる。また、孫猛氏は『黄帝金遺王門曾門經』について、「王門曾門」を譌字とし、『正統道蔵』洞真部に残る『黄帝金匱玉衡經』一卷

① 原文では「乙巳占黄帝注金遺經十」となっている。しかし「乙巳占」は唐の李淳風による占術書の名であるから、『日本国見在書目録』ではその巻数が欠落し、書名が「黄帝注金遺經」とつながってしまった、と推定した。森立之の「金匱考注」も同様の見解だが、森は「金遺經」を「金匱經」に作る。

② 「黄帝」二字は、「クク」となっており、その前にある「乙巳占黄帝注金遺經」に従えば、書名は「乙巳金遺經」となる。しかし、それが「乙巳占」と「黄帝注金遺經」の二書が連結した結果だとすれば、本来は「黄帝金遺經」であったと読むことができる。

③ 判読困難。「試」「誠」などの可能性もある。孫猛『日本国見在書目録詳考』（1534頁）では「誠」と作り、「誠」の異体字とする。

と関係があると推察する<sup>(8)</sup>。そこで、本稿では『黄帝金匱経』と『金匱録』の関係にも注目して論じたい。

## 2. 『医心方』所載の『金匱録』佚文

『医心方』には、朱筆でヲコト点<sup>⑧</sup>が、墨筆で漢字に訓が傍記されている。底本は国立文化財機構「e国宝」で公開されている半井本に基づき<sup>(9)</sup>、『金匱録』佚文5則をヲコト点に従って読み下した釈文を下文に載せる。漢字の傍記部分とヲコト点による送り仮名はカタカナで表し、ひらがなは筆者が補った部分を示す。

### a) 七禽食方

以下は、『医心方』巻二十六の冒頭にある『金匱録』七禽食方の全文である。

○匱、求位反、匣<sup>①</sup>なり。『金匱<sup>②</sup>録』ニ云ふ。「黄帝ノ受ク所ノ真人中黄直七禽食方。今案るに、『大清経』七禽散ト号す。黄帝、懸圃<sup>モノイミ</sup>ニ齋シ、以て中黄直<sup>イタ</sup>ニ造ル。中黄直カ曰ク、「子、何<sup>ナ(ニ)スルモノ</sup>為者也」と。黄帝曰ク、「今、天下の主を棄て、願うに長生の道を聞かム」と。中黄直カ曰ク、「子天下<sup>オサ</sup>を為ムルコト実ニ久シ。而シテ復び長生<sup>ノ</sup>之道ヲ求むコト。貪<sup>ムサホ</sup>ラス乎<sup>ヤ</sup>」。黄帝ノ曰ク、「天下<sup>クモ</sup>を有ツコト実ニ久し。今、躬<sup>ミスカ</sup>ヲ耕ハシ食ヒ、深く靖ナル処<sup>シツカ</sup>に居て<sup>キ</sup>③、禽獸ヲ伍と為シ、万民を煩ハスコト无きを欲す。其の道ヲ得ざるコトを恐る。敢テ身ヲ治の要、生ヲ養フの宝ヲ問ふ」と。中黄乃ち作り、而テ歎きテ曰ふ、「至<sup>カナ</sup>レル哉<sup>カ</sup>、子之間や。吾れ将ニ七禽之食ヲ造ス。以テ長生ニテ、

① 匣の左側が虫損で判読できないが、『説文解字』の「匣、匣なり。求位切」により、「匣」と判断した。

② 「匱」は「匱」の異体字。『医心方』では『金匱録』『金匱録』の二通りの書き方がある。後述の『日本国見在書目録』に『金匱経』十巻などが著録されるので、便宜上の理由から、本稿では原文上の異体字「匱」を保つことにする。

③ 「深居靖処」は居に「井(キ)」との傍記があること、またヲコト点に基づき、「深く靖ナル処に居」と読んだが、「深居」は隠逸する意味があるので本来は「靖ナル処に深居し」と読むべきだろう。

④ 「沢写者白鹿之加也寿八百歳」を「沢写は、これを白鹿に与え、(白鹿の)寿命が八百歳になる」と解釈した。その根拠として、『神仙服食経』に「白兔、之(白蒿)を食らわば神仙す」(『齐民要術』白蒿項)、『埤雅』蒿項に「仙経曰。白蒿、白兔食之仙」、『名医別録』に「庵菴子…駝驢之を食らえば神仙」(『證類本草』第6巻)などあるうえ、『晏子春秋』に「吾君仁愛曾禽獸之加焉。而況于人乎」とある。君主は禽獸にさえ仁愛を施すのだから、人においてはなおさらであるとの意味で、「禽獸之加」が「禽獸に之を加ふ」と読めることがわかる。

天と相保すべし。子其れ之を秘<sup>ヒ</sup>セヨ。賢に非れハ之を与<sup>ヲ</sup>フル勿レ」と。  
 常ニ七月七日ヲ以テ沢写<sup>ナマキ</sup>沢写ヲ採ル。沢写ハ白鹿に之を加ふや<sup>④</sup>、寿八百歳。  
 八月朔日ヲ以テ柏ノ実ヲ採ル。柏実ハ猿猴に之を加ふや、寿八百歳。  
 七月七日ヲ以テ蕪藜ヲ採ル。蕪藜ハ騰蛇に之を加ふや、寿二千歳。  
 八月ヲ以テ菴蘆ヲ採ル。菴蘆ハ駝驢に之を加ふや、寿二千歳。  
 八月ヲ以テ地衣ヲ採ル。地衣ハ車前ノ実也。子陵に之を加ふや、寿千歳。  
 九月ヲ以テ蔓荊ノ実ヲ採ル。蔓荊実ハ白鶴に之を加ふや、寿二千歳。  
 十一月ヲ以テ彭勃ヲ採ル。彭勃ハ白蒿なり。白菟に之を加ふや、寿八百歳。  
 皆陰乾テ、瓦器ノ中ニ盛り、封塗シテ泄らしむコト無キ也。正月上辰日に治合シ  
 下篩シテ、分等にせしむ。美棗ヲ三倍シ、諸草、美桂一分トヲ韋囊<sup>オシカハ</sup>ノ中ニ置き泄  
 しむなき也。三指撮ヲ以テ、食後に至り之を飲服するヲ為ス。百日ニして耳目聰  
 明ニテ、夜視ニ光あり、氣力自ら倍シテ堅強。常ニ之を服セハ、寿天地<sup>ツイヤ</sup>ヲ喫ヘス」  
 と。 蔽「玉篇」必袂反、掩なり。熒「玉」戰祭反。困なり、惡なり、「説文」曰ふ、「頃、什なり。俗に弊に作る」と。

この七禽食方では、7種の植物を採集したのち、乾燥させ、それらを瓦器で正月最初の辰の日まで保存する。そして、毎日食後に7種の植物の粉末を3つまみ服用すれば、元気になり、長命が得られるという。また、この7種はすべて、『神農本草経』上品に列せられる植物名である。そのうち、「地衣」と「彭勃」は、それぞれ「車前実」と「白蒿」だと説明を加えられている。後者の「車前実（車前子）」と「白蒿」は『神農本草経』の正名なので、本草書に基づいて後世に加えられた注釈が、のちに正文に竄入した部分ではなかろうか。

月日	七月七日	八月一日	七月七日	八月	八月	九月	十一月
植物	沢寫（瀉）	柏実	蕪藜	菴蘆	地衣（車前子）	蔓荊実	彭勃（白蒿）
動物	白鹿	猿猴	騰蛇	駝驢	子陵	白鶴	白兔
寿命	八百歳	八百歳	二千歳	二千歳	千歳	二千歳	八百歳

表1. 七禽食方の採集時期、植物、動物、動物の寿命。

動物7種についてみると、哺乳類4種、鳥類1種のほか、騰蛇は翼をもつ蛇の類であろう。残る子陵がどんな動物かは不明である。子陵は巖光の字でもある。劉秀（光武帝）が巖光を探した際、彼は富春江の湖畔で釣りをしていたという逸話がある。文王が、渭水で釣りをする太公望呂尚と出会ったという『史記』の逸話を彷彿とさせる話である。七禽食方で子陵が「地衣」を食べるとされるが、『芸文類聚』の『列仙伝』佚文

では呂尚がそれを食べて仙人になったとされている<sup>(10)</sup>。釣りをする賢人と仙薬「地衣」の組み合わせは、偶然によるものだろうか。いずれにせよ、七禽食方というからには、子陵は人物ではなく、まず禽獣の一種と考えるべきだろう。また、車前（オオバコ）を地衣とするのは、七禽食方と『芸文類聚』の『列仙伝』佚文のみで、神仙道専用の呼称だったらしい。

つぎに、月日と動物の寿命の関係をみてみよう。まず、7月7日七夕の沢瀉を白鹿が食べると八百歳まで生きるという。そのあと、柏実は8月1日で、蕪藜は再び7月7日となっている。庵藎以下4種は日付が特定されていない。また寿命は、八百歳と二千歳がそれぞれ3種あり、地衣の場合は千歳という。このように日付が特定されていても、より長命になるとは限らない。また日付と寿命にも対称性がみられず、不均衡である。

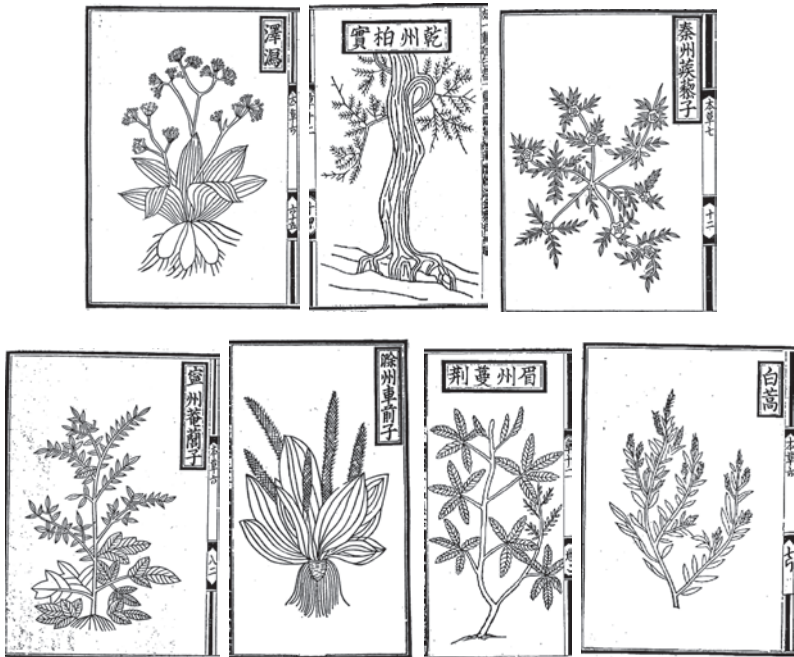


図1 武昌医館叢書本『大観本草』草部上および木部上の図<sup>(11)</sup>。すべて『神農本草經』上品である。

## b) 五茄

『金匱録』佚文には、五茄（五加）について詳しく解説したものがある（『週年要鈔』にもほぼ同じ引文がある）。五茄はウコギのことで、五出の掌状複葉をもち、小葉が放

射状に展開することから、それぞれ四方位に対応し、最後の小葉が中央を担うという。五行に基づき、木（東、青）、金（西、白）、火（南、赤）、水（北、黒）、土（戊己、黄）の順で説明されている。これは、相侮の（相克と逆行する）順になっている。

○『金匱録』云。五茄者、五行之精。五葉同本而テ外分。名ノ故ハ五ト者、五家之に相ひ鄰比するが如し。青霧茎ヲ染テ、東方之潤ヲ粟ケ、白氣節ヲ営み、西方之津を資し、赤色花ニ注イ、南方之暉ヲ含み、玄精骨ニ入り、北方之液ヲ承け、黄烟皮ヲ薫し、戊己之沢ヲ得て、五種鎮生相感し而て成る。之ヲ行う者ハ仙ニ昇り、之ヲ服す者ハ嬰ニ反る。魯ノ宣公カ母単ニ其ノ酒ヲ服して、以て不死を遂ぐ。

此の三行、字治本無し、重基本之有り、重忠本之無し。或る方。服五茄散方。五茄、天門冬、伏苓、桂、椒、冬葵子の六物、分等し搗き篩し、井華水を以て一刀圭を服す。先ず食すこと日に三たび。卅日絶ゆる勿れ、仿髯として神を見ゆ。五十日して司命死籍を去り、七十日して神通を与ふ。

魯宣公の母が五茄酒を飲んだというのは、紀元前6世紀の話になる。なお、上掲の『日本見在書目録』にも『五茄酒方』一卷が著録されていて、五茄酒は古くから作られているらしい。現在の中国でも薬酒として「五加皮酒」の名で売られている。

### c) 服菊方

『金匱録』佚文には「服菊方」と題して、いわゆる菊華水の話も記される。この菊華水の伝説は陶淵明や重陽節にも影響を与え、現在では朝鮮半島、日本、タイなどでも菊水の文化が広がっている。以下は、『金匱録』の服菊方である。

○服菊方。此の『金匱録』文、字治本無し。『金匱録』云ふ。南陽酈県山中に甘谷有り。水甘美。爾る所以者、谷上左右に皆菊生ず。菊華其の中に墮ち、歴世弥久し。故に水味変を為す。其の臨此の谷を望み居る民は、皆井を穿たず、悉く谷水を食ふ。谷水を食ふ者、寿考ならざる無し。高き者は百四五十歳、下き者は八九十を失せず、夭年する者無し。正に是れ此の菊力を得る也。漢司空王暢、太尉劉寛、太尉袁隗、皆曾て南陽太守を為す。官に到る毎、常に酈県をして月に甘水三十斛を送らしめ、以テ飲水の為にす。此の諸公多く風痺及び眩冒を患い、皆愈るを得る。

この『金匱録』中の菊華水佚文に似た記述が、葛洪『抱朴子』仙藥篇および『芸文類



聚』菊項に引かれる応劭『風俗通』の佚文にもある。その比較は別稿にて発表済みなので、以下の表2にその一部を示す<sup>(12)</sup>。これら3佚文は「南陽酈県」に始まるが、『金匱録』『風俗通』は「皆得愈（瘳）」で終わり、『抱朴子』はその後さらに21字続く。ここで3書の佚文を比較してみた。

『金匱録』「南陽酈県山中有甘――谷水甘美所以爾者谷上左右皆生―菊華墮其中歷世彌久」  
 『抱朴子』「南陽酈県山中有甘谷水谷水――所以甘者谷上左右皆生甘菊菊花墮其中歷世彌久<sup>(13)</sup>」  
 『風俗通義』「南陽酈県――有甘谷―谷水甘美――云其山上――大有菊――」<sup>(14)</sup>

表2 菊華水佚文の前半部分の比較

3書の佚文を比較した結果、『金匱録』佚文全135字に対し、『抱朴子』と相同である字数は120字。一方、『風俗通』のそれは60字である。このように『金匱録』と『抱朴子』にある菊華水の文は極めて似ることがわかる。つまり、どちらか一方が他方を引用転載したか、両書が現在佚書となった典籍の内容をともに引用した結果と考えられる。

#### d) 益智方

『医心方』巻二六には、不老長寿を目的とした処方他に、記憶力を強化する「益智方」にも『金匱録』の佚文2則が引用されている。

○『金匱録』ニ云ふ。真人心ヲ開き聰明ニ忘れぬ方。昌菴<sup>①</sup>、遠志各甘兩、伏苓八兩。治合テ、方寸ノ匕食ムに後レ服す。日ニ二、三十日ニテ、經ヲ誦ふに千言、百日ニテ万言是を過レハ一字ヲ忘れず。又方、昌菴根、遠志、茯苓各六分、石菴イハカシハ(イハクサ)、甘草各四分。凡て五物を搗きて下篩して、食ムに後レ方寸ノ匕、日三、十日ニ服す。一ヲ問へば十ヲ知る。

○又云ふ。孔子精神ヲ練シ聰明ニ忘れず心ヲ開方ヒラク。遠志七分、昌菴三分、人參五分、伏苓五分、龍骨五分、菴黄五分。凡て六物、治合テ下菴テ、王相ノ日を以テ、井華水ヲ以テ服ス。方寸ノ匕ヲ、日ニ再ヒ。廿日ニテ声ヲ聞き情ヲ知り、忘れず。

このように、『金匱録』には記憶力を強化する方法も記されていた。

① 「菴」は蒲の異体字。

以上のa)～d)をみると、『金遺録』の内容は『金匱要略』といった一般的な医書とは異にする。佚文に黄帝が出てきたり、五行説と深くかかわる五茄の記載があったりなどは、『黄帝金匱経』との関連をうかがわせる特徴がある。

### 3. 七禽食方と七草粥

さて、七禽食方は正月上旬辰日（最初の辰日の日）に7種の植物を粉末にし、それを毎日摂取すると長生するという方法であった。これに似た風習として、日本では、正月7日に7種の植物を粥にして食べる七草粥がある。七草粥が元来、中国の伝統的習俗であることは論を俟たない<sup>(15)</sup>。本山荻舟の調べによれば、『延喜式』にもともと7種の雑穀粥（固粥）を正月15日に食べる決まりがあり、それが『荆楚歳時記』によって、のちに正月7日に落ちついたとみている<sup>(16)</sup>。

『荆楚歳時記』は、6世紀に南朝梁の宗懐が民間行事を記録した月令の書である。それには「正月七日を人日とす。七種菜を以て羹を為す……北人此の日煎餅を食す、庭中に於て之を作る。（これを）熏天と云う。未だ出る所を知らざる也」とある。『荆楚歳時記』には羹に入れる7種が何であるかなど詳しい情報が示されていないが、この記載が、七草粥の原型として広く知られている。ただし、筆者は湖北省に3年滞在したなかで学生などに聞き取りした限りでは、これに類する習俗が残っているという情報は得られなかった<sup>①</sup>。また、唐代に同様の風習があったとする説もあるが、筆者の調査ではそのような記載は見つけられなかった。

ただし、「北人此の日煎餅を食す」という北方での習わしは、唐朝の宮廷に引き継がれていた。『唐六典』尚書礼部によれば、朝廷が官僚に節句料理の食材を配る規定が設けられていて、その原注に「寒食に麦粥、正月七日、三月三日に煎餅、正月十五日、晦日に膏糜……と謂う」とある<sup>(17)②</sup>。煎餅、すなわち小麦粉を水で溶いて焼いたものを正月7日と3月3日に食べていたことが分かる。朝廷は中原にあるため、北方の遺風が残るのは当然の結果といえよう。『唐六典』は遣唐使により日本に渡り、律令制定の参考とされた。

① 『荆楚歳時記』にある「五月五日……艾を採り以て人と為し、門戸の上に懸けて、以て毒気を禳う」という端午節の風習は、今でも広く行われている。ただし人の形にはせず、根本で切ったものを逆さにして、家屋の玄関の扉に下げる。

② 『唐六典』光祿寺（巻15）にも同様の記載がある。ただし、麦粥を餲粥に、膏糜を糕糜に作る。光祿寺は宮廷の食膳や祭祀を司る部署で、普段の食膳に、節句料理を加えるように規定されている。

一方、南方では正月7日に七種の野菜の吸い物をとる習慣が連綿と引き継がれていたようで、客家の風習として各地に残っている。とくに広東省東南部の潮汕地区での「七様菜」に関する情報が多いが<sup>(18)(19)</sup>、福建省、江西省にもこうした風習が残っている。名称も地域によって様々で、「七様菜」のほか、「七宝羹」「七宝湯」「七色菜」「七様菜茶」といった呼称がある。七種の食材も、地域によって違いがあり、「ネギ・セリ・ニンニク・レタス・タカナ・香菜・ユリ」の7種であったり、「カラシナ・タカナ・ユリ」の代わりに「ニラ・豆腐・魚肉」を加えたりする。

日本では、室町時代ごろの『御伽草子』七草草子に、楚人「大しう」が老いた父母のため祈ったところ、帝釈天が彼に七草を教えたという話がある<sup>(20)</sup>。その話によれば、須弥山の南に白鷺鳥という鳥がいて、毎年春に七色の草を食するため、長寿で、すでに八千歳になっているという。七草を柳の盆に載せ玉椿の枝で次の時刻に順次叩く、正月六日の酉の刻に芹を、戌の刻に薺を、亥の刻に御形を、子の刻にたびらこを、丑の刻に仏の座を、寅の刻にすずなを、卯の刻からすずしろを叩く。辰の刻にこれら七草を合わせ、東にある岩井の水で、白鷺鳥が来る前にこれらを食べる。すると、老父母は二十歳くらいに若返ったという。

この七草草子という逸話で、楚国のある老夫婦が正月七日の辰の刻に7種の草を服用する点は、『荆楚歳時記』の記載にもつながる点があり、七草が中国由来であることを物語っている。「七草草子」では正月七日の辰刻に七草を合わせるが、七禽食方では正月上辰日（正月最初の辰の日）に7種の植物を混ぜている。正月上旬の辰にちなむ日時である点が共通している。「七草草子」での白鷺鳥が7種の草を食らい八千歳になったという構図は、七禽食方の7種の動物がそれぞれ特定の植物を食べると、八百～二千年生きるとする点と似ている。これは七禽食方の由来が徐々に変化し、動物が白鷺鳥という一匹の動物に収斂した結果、七草草子の話に変じたのかもしれない。

現在、七草囃子で「七草なずな、唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に、七草たたく」と唱える風習が伝わっているが<sup>(21)</sup>、ここにも鳥が出てくる。これは、『荆楚歳時記』には7種菜の以外に「正月夜、多く鬼鳥度る。家家床を槌き、戸を打つ……以て之を禳う」ともあって、正月の夜に音を出して鬼鳥を追い払う風習もあったことがわかる。本山荻舟はこれを指摘し、「大陸から毒鳥が渡来して本土に疫癘を蔓延させるから、（七草囃子で）渡らぬ先に打ち払うのだと」指摘している。唐代『嶺表録異』には「鬼車……嶺外尤も多し、愛く人家に入り、人の魂氣を燦す」とあって、鬼車鳥は南嶺山脈以南、つまり広東省やその周辺に多いとされている<sup>(22)</sup>。これらの地域で禽類を扱う人が、鳥インフルエンザウイルス（H5N1）のような伝染病に罹患しやすいことを経験的に知ってい

たのかもしれない。江戸時代後期の山東庵京山撰『五節供稚童講釈』（1832年）には、歌川国芳が七草を打つ親子と「鬼車鳥」が描かれている。このように、中国から悪鳥が渡ってくるとする話は、民間にも伝わっていたようだ。

『御伽草子』では、「白鷺鳥」が7種の植物を食らう話になっていた。この不死鳥は、貴重な7種の草を食らい尽くすことを除けば、実害のない鳥であった。しかし現在では、この鳥が災厄をもたらすため、それに備えて七草粥を食べると解釈されているし、『荆楚歳時記』にも正月に鬼車鳥の逸話がある。こうした経緯をみても、伝承や習俗に多様性があり、同じ時代であっても、地域によって違いがあったのだろう。

七禽食方では、正月上辰日（最初の辰日の日）に7種の植物を粉末にすると記されていたが、正月上辰日に特定のもの食べる風習として、『西京雜記』に「正月上辰、池辺に出て盥濯し、蓬餌を食らひ、以て妖邪を祓ふ」という記載がある<sup>(24)</sup>。『西京雜記』の書誌に不明な点が多いので、これが前漢の風習を正確に伝えたものかは慎重を要するが、いずれにせよ六朝およびそれ以前の記録とみられる。正月上辰日に「(手足を洗い、)蓬餌<sup>(25)</sup>①を食ふ」点は、『荆楚歳時記』『唐六典』で正月七日に「煎餅」食べる習慣と似ており、もともとは正月上辰日の習慣であったのではなからうか。いずれにせよ、『西京雜記』には正月上辰日に特定のもの食べ、邪を払うのは、古い風習があったと分かる。七禽食方も同じ日に加工することになっていたので、こうした正月上辰日の風習が、のちに七種の植物にちなんで正月七日の風習になったのではなからうか。『延喜式』の七種粥が小正月に食べられていたことから、当初は正月上旬に食べる風習で、中国から伝わる過程で、この風習や内容に、様々な形態の風習が網状に伝播していたと考えることもできる。



『五節供稚童講釈』初編「唐土の鳥の事」<sup>(23)</sup>  
婦人が布団で赤子を覆いながら、七草を打つ様子と、それを見下ろす「鬼車鳥」が描かれている。

① 餌は米や豆の粉末をこねた食べ物をいう。食用となる蓬はヨモギとは限らない。飛蓬（アカザ科の *Agriophyllum squarrosum*、別名「沙米」）があるので、蓬餌はこれを用いてつくった餅状の食べ物かもしれない。

#### 4. 『神仙服食経』と『金匱録』

次に、『金匱録』の撰者「京里先生」についても考察したい。史書に「京里先生」の記載はなく、その足跡をたどることができないため、いつの時代の人物かも分からない。そこで「京里先生」を撰者とする書を探してみると、『金匱録』のほかに『神仙服食経』という書もあった。『神仙服食経』は十巻本が『隋志』に2か所重複して著録され、『宋志』には一卷本が著録される。ただし、ともに撰者の名は挙がっていない。

ただし、『神仙服食経』の佚文が、北魏賈思勰の『齐民要術』（6世紀前半）や宋初の『太平御覧』（983年頃）にみられる。

『齐民要術』巻10（白蒿）「『神仙服食経』曰ふ、『七禽方。十一月旁勃を采る。旁勃は白蒿なり。白兔之を食へば、寿八百年』と<sup>(26)</sup>」。

『太平御覧』巻998（榲苳苳）「『神仙服食経』に曰ふ、『車前実、雷の精なり。之を服せば、形化す<sup>(1)</sup>。八月に地衣を採る。地衣は車前の実なり<sup>(27)</sup>』と」。

この2つの佚文は、七禽食方に引いた下線部と近似するうえ、『齐民要術』には「七禽方」という名称もみえる。こうした事実から、『金匱録』『神仙服食経』の撰者がともに京里先生であることは明白である。また『齐民要術』に引用文があることから、『神仙服食経』の成書が遅くとも南北朝時代以前であり、したがって京里先生および『金匱録』の成書年も南北朝時代以前と推定できる。

梁永宣氏が指摘するように、『正統道蔵』には撰者を京里先生とする『神仙服餌丹石行薬法』が収録され<sup>(28)</sup>、その「神仙服食餌石」は、『齐民要術』地榆に引かれる『神仙服食経』と内容が似る。よって『神仙服餌丹石行薬法』は『神仙服食経』の佚文であらう。

『正統道蔵』には、さらに撰者を「京黒先生」とする『神仙服食炁金櫃妙録』も収載されている<sup>(29)</sup>。この書名は『神仙服食経』と『金匱録』を兼ね合わせた名であるから、京黒は京里の誤記と考えうる。

七禽食方は『大清経』では「七禽散」という名称になっていた、と丹波康頼は記して

いた。この七禽食方の別称「七禽散」は、陶弘景『本草集注』白蒿条にも「服食『七禽散』に云う。白兔白蒿を食らば仙、前の庵藺子と同法なるのみ」としてみえる<sup>(30)</sup>。その内容も白兔が白蒿を食べる話で、『医心方』七禽食方の内容と一致している。陶弘景も七禽食方を目にして、その一部を『本草集注』に引いたのであろう。なお、「前の庵藺子と同法」とは、『本草集注』に収載された『名医別録』庵藺子項のことで、「駟驢、之を食らへば仙<sup>(31)</sup>」とある。

なお、『太清経』の「太清」は三清の一つである「太清」であろう。『太清経』と称する書には複数の種類があるが、丹波康頼が用いた『大（太）清経』の撰者や成立時期は不明である。

- ・『日本国見在書目録』医方家に「『太清経』十二玄超撰」とあり、撰者を玄超とする。
- ・唐代の道世が撰わした『法苑珠林』（659年）には「梁時の陶弘景、『太清経』及び『衆醮儀』十巻を造る」とみえ<sup>(32)</sup>、陶弘景も『太清経』を著したとする記録もある。
- ・『雲笈七籤』巻二には「尹寿子」という人物が『太清経』を作したとある<sup>(33)</sup>。
- ・葛洪『神仙伝』佚文には、白和という人物が瀛洲の石室でその北壁を三年間じっと目を凝らしたところ、文字が浮かび上がり、それは「古人所刻」（いにしえの人が石に刻んだ）『太清経』で、それを唱えることで仙人になれたという話がある<sup>(34)</sup>。

このように、撰者を玄超、陶弘景、尹寿子としたものや、いにしえの人が石に刻んだとするものなどがある。

一方、『抱朴子』『肘後救卒方』には、葛洪が自ら見たという文献名が記される。

『抱朴子』雑応篇「余、戴霸、華佗の集める所の『金匱緑囊』、崔中書『黄素方』及び百家雑方、五百許巻を見ゆ<sup>(35)</sup>」

『肘後救卒方』葛洪自序「余既に墳索を窮覽し、著述の余暇の以て、術数を兼綜す。仲景、元化、劉戴、『秘要』、『金匱緑秩』、『黄素方』、近将千巻を省<sup>み</sup><sup>(36)</sup>」

両書に挙げられた『金匱緑囊』『金匱緑秩』は、ともに中国の芸文志・経籍志に著録されない。『金匱』『緑囊(秩)』の二書だと解釈することも可能だが、『緑囊(秩)』なる書は歴代の書目に著録されない。たしかに、孫思邈『千金翼方』序に、「耄及の年、竟に三餘して薬餌に勤しむ。華公の『録帙』を酌み、異術同窺す。葛生の『玉函』を採り、奇方畢綜す」とある<sup>(37)</sup>。これによれば、孫思邈は華佗の『録帙』をみたということになり、『金匱緑囊』『金匱緑秩』は、それぞれ『金匱』と『緑囊』、『緑秩』に分けることが正しいとなる。ただし、この『緑囊』、『緑秩』が華佗の作だとすると、『抱朴子』の前掲文は、戴霸の『金匱』、華佗の『緑囊』となるが、『金匱』『緑囊』なる書は歴代の図書目録に著録されていない。また、上掲の『金匱要略』の無名氏序に、「仲景、『金匱録』、岐、黄、素、難の方千卷に近将す」とある点は、『金匱』と『緑囊』、『緑秩』に分けられないことを示唆する一文である。おそらく、各書の今本には、訛字や脱字があり、混乱した状態にある。以上の点に加え、「緑」と「録」は上古音・中古音が一致し、字形も似るため、『金匱緑囊(秩)』は『金匱録』をさすと推定できる。

この問題については、平田篤胤や多紀元胤が既に論じており、そのことは遠藤次郎氏らの論文に詳しいが、いまだに解決に至っていない。遠藤次郎氏らは、葛洪関連の文献を参考にして、葛洪には『肘后方』三巻のほか、『玉函方』百巻も著したと推定した<sup>(38)</sup>。また、『晋書』葛洪伝には、葛洪の著述について「『金匱薬方』一百巻、『肘后要急方』四巻」と書かれている<sup>(39)</sup>。これと比較し、真柳誠氏は、『玉函方』は『金匱薬方』と呼ばれていたらしいと推定する<sup>(40)</sup>。ともかく、『抱朴子』と『金匱録』の菊華水伝説の文言は非常に似ている。これは、葛洪と『金匱録』との結びつきを示すものである。一方で、『肘后方』の葛洪の文や『抱朴子』には、青龍・白虎・建中など仲景処方と共通する方名がある<sup>(41)</sup>。再び、『医心方』に残る丹波康頼の「『大清経』七禽散と号す」という注釈に注目したい。まず、陶弘景『本草集注』にも「服食七禽散」が引用されていて、「七禽散」という名が共通してみられる。つぎに、『大清経』についてみると、まず『隋志』に抱朴子撰とする『神仙服食薬方』十巻が、『新唐志』にも抱朴子(すなわち葛洪)を撰者とする『太清神仙服食経』五巻がそれぞれ著録される。とくに後者の書名は「神仙服食」の四字を除くと、『太清経』となる。丹波康頼が参照した『大清経』の内容も服食方を含むので、彼が参照した『大清経』が葛洪の手を経た『太清神仙服食経』であった可能性もあろう。

さらに、『抱朴子』『肘後救卒方』の両序によれば、葛洪は『金匱緑囊』『金匱緑秩』

を参照したらしいので、それらの書から抜粋して『太清神仙服食経』を著し、それを丹波康頼は『太清経』の名で、中国では『神仙服食経』の名で引用されていた可能性も検討の余地があろう。現存文献では、『神仙服食経』は葛洪没後約190年後の『齐民要術』に初見するし、『神仙服食薬方』と『神仙服食経』は『隋志』でともに十巻本であるので、あるいは同一の書であった可能性もある。

『金匱録』の「(五茄) 五葉同本而テ外分……五家之に相ひ鄰比するが如し」の部分は、類似した文が『本草和名』と『倭名類聚抄』で『神仙服餌方』を出典として引用されている<sup>①</sup>。この部分について、篠田統氏は、『本草和名』等に引かれる『神仙服餌方』は、『神仙服食経』と書名も似るだけでなく、その記載内容も類似するので、同系のもの、あるいは同一の疑いもあるとした。『神仙服餌方』の佚文は『本草和名』に23条、『倭名類聚抄』に2条みられるとする<sup>(42)</sup>。これらの佚文は『神仙服食経』ひいては、『金匱録』の研究においても重要な資料である。

## 5. 京里先生の時代と『金匱録』の成書時期

『金匱録』にみられる菊華水伝説は、王暢（168年に司空を務める）、劉寛（119年—185年）、袁隗（?—190年）がいずれも後漢の人物であることから、明らかに後漢の逸話である。これによれば、『金匱録』の成書は後漢以降、葛洪以前と推定できる。本稿の冒頭で述べたように、七禽食方の植物がすべて『神農本草経』の上品に記載されることや、『列仙伝』にもみられる「地衣」という植物名が七禽食方にもみられるなどの関連性が認められる。これら『神農本草経』や『列仙伝』の成立も、やはり後漢ごろの成立とみられているため、七禽食方の内容も後漢頃の神仙思想や本草学を反映したものと推定できる。これは七禽食方の植物7種がすべて、『神農本草経』上品に列せられる点も、その傍証といえるだろう。この時期の本草文献は大変限られているため、『金匱録』佚文は医薬文献としても価値がある。

しかし、この時期の人物に活躍した人物で京里先生らしき者は見らない<sup>②</sup>。そこで、

- 
- ① 『本草和名』ではさらに「服餌方」から「白蒿、一名彭勃」が引用されるが、これは七禽食方および『齐民要術』所引の『神仙服食経』佚文と類似する。
- ② 『後漢書』周磐伝に「夢に先師東里先生を見る。陰堂の奥にて我に講ずるを見る」という記載もある。



葛洪の『抱朴子』内篇や『神仙伝』を再び啓いてみると、角里先生という人物がしばしば登場している。角里先生は『史記』『漢書』に商山四皓の一人として記録される人物で、角里は二字の姓である。商山四皓とは秦朝の末期から漢朝の初頭に生きた隠士で、漢朝に仕えず、隠遁したという。ほかに、東園公、夏黄公、綺里季がいる。

角はめったに使われない字なので、それが転写の際に訛り、角里先生と書かれたり、音通から禄里先生と書かれたりする。一説に角里は今の江蘇省呉県にあたる地名で、そこに隠遁したため、地名が姓になったという。

葛洪の記載によれば、角里先生は稷丘子から『化黄金法』を授かり、また華子期に『隱仙靈宝方』を授けたとあり、さらに『長生集』一卷『少君道意』十卷なども撰述したという。角里先生は様々な道書と縁がある人物であるが、角里先生が前漢初期の人物なので、後漢の逸事を書きとどめることはありえない（後世の加筆の可能性はある）。後漢頃に無名氏によって書かれた『列仙伝』が後に「劉向撰」と伝えられるようになった例があるので、『金匱録』も後漢ごろに著されたものが、伝世の過程で「角里先生撰」となり、それが訛って「京里先生」となったのではあるまいか。

## 6. まとめ

『金匱録』七禽食方は7種類の仙薬とその加工方法が示された古い記録で、現存史料の中では唯一『医心方』に引かれた『金匱録』佚文が七禽食方の全体を今に伝えている。『医心方』が引く『金匱録』の佚文は他にもあり、その中には後漢の人物が登場する菊華水伝説がある。したがって、『金匱録』は後漢以降の成立とみられる。

『金匱録』という名の書は『隋志』に「二十三卷目一卷 京里先生撰」と著録されている。そして、同一の撰者名で『神仙服食経』という書が『旧唐志』に著録されていた。さらに、6世紀前半『齐民要術』の撰者賈思勰が『神仙服食経』から「七禽方」を引用している。つまり、『神仙服食経』にも七禽食方とほぼ同じ記載があったことが分かる。『神仙服食経』は、『隋書』経籍志で『金匱録』より巻数が少なく記録されるので、『金匱録』の抄録なのかもしれない。

ただし、『黄帝金匱経』の佚文およびそれに基づいて編纂された『占事略決』に、『金匱録』と重複する部分はない。『占事略決』には、胎児の性別を知るなどの産事占があり、これが『医心方』にもみられるが、その典拠は『金匱録』ではない。こうした点から、『黄帝金匱経』と『金匱録』が同一の書であるとは言い難いが、前者が黄帝を冠する書であ

り、後者は黄帝の故事が出てくるなどの関連性は認められる。

また、『齊民要術』よりやや早い南朝の陶弘景『本草集注』白蒿に「服食七禽散」を引いている。これにより、陶弘景も七禽食方とほぼ同じ記載を目にしていたことが分かる。七禽食方「(服食)七禽散」「七禽方」は、ほぼ同じであると考えられる。以上より、七禽食方は陶弘景以前にすでに存在していたことが明らかとなった。

さらに、七禽食方を載せる『金匱録』の成立はさらに古いとみられる。葛洪は『抱朴子』『肘後救卒方』で、それぞれ『金匱緑囊』『金匱緑秩』という参考書を挙げている。そして、『金匱録』佚文にある「服菊方」は、葛洪『抱朴子』仙藥篇の記載と酷似しており、一方が他方を参照した可能性が高い。よって、葛洪のいう『金匱緑囊』『金匱緑秩』とは『金匱録』のことと推定された。一方、『神仙服食経』については、葛洪の時代にその痕跡がみあたらなくなっているうえ、史書の図書目録には抱朴子撰として『太清神仙服食経』などが著録されている。葛洪が『神仙服食経』の元となる書を著した可能性もある。

そして、すでに述べたように『金匱録』は後漢以降の成立とみられるため、『金匱録』は3～4世紀前半の間に成立したと判断できる。この中に七禽食方の記載がすでにあつたと考えられるため、七禽食方は4世紀前半以前に成立していたと結論づけられる。ほぼ同時代の『神農本草経』や『列仙伝』(ともに後漢頃成立)とも共通する内容を含んでおり、早期の本草文献としても貴重な記録であることが示された。『金匱録』の撰者とされる京里先生は、葛洪が『抱朴子』などで取り上げている角里先生のこと、後に「角」が訛って「京」になってしまった可能性が示された。

## 後記

本稿は『自然科学史研究』誌上にて中国語で発表した論文をもとに、新たな史料を加えて論じたものです。七草粥に関して国立民族学博物館名誉教授石毛直道先生に資料やご意見を賜りました。永塚憲治氏より、『日本国見在書目録詳考』の情報をいただきました。また、『金匱録』の原文について、本稿では朱筆のヲト点に基づき読みましたが、釈読にはなお検討の余地があります。謹んでみなさまの批正を乞う次第です。

## 参考文献

- 1) 横佐知子『医心方 卷二十六 仙道編』筑摩書房、1994年。
- 2) 日本東洋医学会傷寒金匱編刊小委員会(編)『善本翻刻 傷寒論・金匱要略』日本東

- 洋医学会、2009年、243頁、329頁。
- (3) 岡西為人（撰）、郭秀梅（整理）『宋以前医籍考』学苑出版社、2010年。
- (4) 藤原佐世（撰）『日本国見在書目録』名著刊行会、1996年、74-78頁。
- (5) 長澤規矩也、阿部隆一（編）『日本書目大成（1）』汲古書院、1979年、30-36頁。
- (6) 欧陽脩ら『新唐書』中華書局、1975年、1558頁。
- (7) 小坂眞二『安倍晴明撰「占事略決」と陰陽道』汲古書院、2004年、335-336頁。
- (8) 孫猛『日本国見在書目録詳考』上海古籍出版社、2015年、1532頁。
- (9) 国立文化財機構「e国宝」 [www.emuseum.jp/detail/100173/028](http://www.emuseum.jp/detail/100173/028)
- (10) 長澤規矩也、阿部隆一（編）『日本書目大成（1）』汲古書院、1979年、30-36頁。
- (11) 唐慎微（撰）、艾晟（校定）『經史証類大觀本草』広川書店、1970年、156頁、160-161頁、167-170頁、181-182頁、336頁、345頁。
- (12) 久保輝幸「試論『医心方』中の七禽食方——『金匱録』、『神仙服食方』の成書年代」『自然科学史研究』34（4）、461-469頁、2015年。
- (13) 葛洪（撰）、王明（校釈）『抱朴子校釈』中華書局、1985年、205-206頁。
- (14) 欧陽詢ら（撰）、汪紹楹（校）『芸文類聚』上海古籍出版社、1999年、1390-1391頁。
- (15) 有岡利幸『春の七草』ものと人間の文化史146、東京：法政大学出版、2008年、15-16頁。
- (16) 本山荻舟『飲食事典』平凡社、1957年、432-433頁。
- (17) 李林甫ら（撰）、陳仲夫（点校）『唐六典』中華書局、2014年、129頁、446頁。
- (18) 韓伯泉「広東伝統飲食風俗概観」『広東民族学院学報（社会科学版）』、1989（01）、33、39-48頁。
- (19) 韓伯泉「客家食俗文化三題談」『民間文学論壇』、1994（02）、71-75頁。
- (20) 市古貞次（校注）『御伽草子』日本古典文学大系38、岩波書店、1958年、161-164頁。
- (21) 宮本常一『民間暦』講談社学術文庫、講談社、1985年、265-266頁。
- (22) 劉尙ら『韻表録異其他二種』叢書集成初編、商務印書館、1933年、14頁。
- (23) 山東庵京山撰、歌川国芳画『五節供稚童講釈』初編一、鶴屋喜右衛門、1832年、第10丁裏（国立国会図書館所蔵 請求記号207-1442）。
- (24) 旧題葛洪（編）『西京雜記』四部叢刊461（嘉靖孔天胤刊本）、商務印書館、1919年、卷3b。
- (25) 加納喜光『植物の漢字語源辞典』東京堂出版、2008年、297-299頁。
- (26) 賈思勰（撰）、繆啓愉（校釈）『齐民要術校釈』農業出版社、1982年、645-646頁。
- (27) 欧陽詢ら（撰）汪紹楹（校）『芸文類聚（附索引）』上海古籍出版社、1982年、645

-646頁。

- (28) 梁永宣「金匱、金匱録及仲景金匱録簡考」『中医薬文化』2006年、29-31頁。
- (29) 張宇初、張宇清ら（撰）『(正統)道蔵』文物出版社・上海書店・天津古籍出版社、1988年、第18冊 459-465頁。
- (30) 唐慎微（撰）、艾晟（校定）『經史証類大觀本草』広川書店、1970年、168頁。
- (31) 唐慎微（撰）、艾晟（校定）『經史証類大觀本草』広川書店、1970年、170頁。
- (32) 道世（撰）、周叔迦、蘇晋仁（校注）『法苑珠林』中華書局、2003年、1659頁。
- (33) 張君房ら（撰）『雲笈七籤』四部叢刊546（清真館本）、商務印書館、1919年、卷2-13a。
- (34) 董治安（主編）『唐代四大類書』、清華大学出版社、2003年、1820-1821頁。
- (35) 葛洪（撰）、王明（校釈）『抱朴子校釈』中華書局、1985年、272頁。
- (36) 葛洪（撰）『肘後備急方』人民衛生出版社、1963年、3頁。
- (37) 孫思邈（撰）、林億ら（校）『千金翼方（上）』東洋医学善本叢書13、オリエント出版社、1989年、9頁。
- (38) 遠藤次郎、島木英彦、中村輝子「『金匱玉函經』および『金匱玉函要略方』における葛洪の役割り」『漢方の臨床』49（1）、113-123頁、2002年。
- (39) 房玄齡・李延寿ら『晋書』中華書局、1997年、1913頁。
- (40) 真柳誠「『金匱要略』の成立と版本」『漢方の臨床』57（3）巻、405-420頁、2010年。
- (41) 遠藤次郎、島木英彦、中村輝子「『金匱玉函經』および『金匱玉函要略方』における葛洪の役割り」『漢方の臨床』49（1）、113-123頁、2002年。
- (42) 篠田統「中世食経考」『中国食物史の研究』八坂書房、1978年、115-116頁。